

APSORC13・2013 日本放射化学会年会・ 第57回放射化学討論会 印象記

横山 明彦
Yokoyama Akihiko

APSORC 国際学会の経緯

今回で5回目を数える APSORC は、これまで熊本市、福岡市、北京、ナパ（米国カリフォルニア州）と開かれて久しぶりに日本に戻ってきました。今回日本で開催するに当たって、日本放射化学会主導で編成した APSORC13 実行委員会と、開催地である金沢市近辺の関係者で構成した金沢シンポジウム委員会を作って共同作業で学会を企画運営し、今後日本での開催のモデルケースを構築することを目指しました。実行委員長も（独）日本原子力研究開発機構 先端基礎研究センターの永目論一郎氏と金沢大学 環日本海域環境研究センターの山本政儀教授が共同で務めました。金沢市が開催地に選ばれた経緯は、1954年にビキニ環礁の水爆実験によって汚染したマグロ（当時は原爆マグロと呼ばれた）が市内の近江町市場に入荷された歴史があり、金沢大学での放射能研究の歴史は古く、関連の研究者が少なくないことがあります。また、国際会議を企画するに当たっては、会議ができる施設などのインフラ、金沢コンベンションビューローをはじめ、金沢市、石川県からの会議への援助など条件がそろっている利点がありました。筆者は今回 APSORC13 金沢事務局を担当いたしましたので、開催側からの報告の部分が主になることをご容赦ください。

APSORC13（金沢）について

金沢では秋の心地良い季節となった、9月22～27日にかけて、金沢市文化ホールで「5th

Asia-Pacific Symposium on Radiochemistry'13 (APSORC13)」(第5回アジア太平洋地域放射化学国際会議)が開催されました(写真1, 2)。今回は日本で開催するために日本放射化学会年会・放射化学討論会を兼ねた会となりました。

今回設定された討論課題の項目は、1. Fukushima issues, 2. Education in nuclear and radiochemistry, 3. Nuclear forensics, 4. Nuclear energy chemistry, 5. Nuclear chemistry, 6. Actinide chemistry, 7. Environmental radiochemistry, 8. Radiopharmaceutical chemistry, Nuclear medicine, 9. Nuclear probes for materials science, 10. Activation analysis, 11. Application of nuclear and radiochemical techniques でした。特に、福島第一原子力発電所事故による放射能汚染は国際的にも注目されており、この学会でも重要な話題の1つとして話し合われました。放射化学のみならず関連分野の研究者からの関心は高く、発表



写真1 学会風景



写真2 学会参加者記念写真



写真3 若手の会の一コマ

数は予想を超えて343件(口頭発表108件,ポスター発表235件,海外から61件+83件を含む)となりました。海外からはアメリカ,中国,韓国をはじめ,遠くヨーロッパからも多くの参加を戴き,計25か国の参加がありました。これには直前に,超重元素化学に関する研究会CHE8(8th Workshop on the Chemistry of the Heaviest Elements, 9月19~21日,高山市)が開催されたことも影響しているかもしれません。

開会式は北陸大学箏曲部による和装での琴と尺八の演奏によって日本らしさを強調した趣向で始まり,まずはヘベシーメダル賞の授与式とその受賞講演が行われました。賞は化学分離を伴う放射化分析法の開発の業績によってポーランド核化学技術研究所のR.S. Dybczyński教授に与えられました。次いで山本政儀教授の特別講演が行われ,福島第一原発事故によって大量に放出された放射性核種について概説されました。

また,その他の特別講演として,核化学分野ではスイス,ポール・シェラー研究所・ベルン大学のA. Türler教授によって近年の超重元素の化学の進展について概観されました。この分野は欧米主導で始まった感がありますが,最近では日本の研究グループも多くの業績を出すようになり,また中国も力を入れてきている印象を持ちました。核・放射化学教育のセッションでは,チェコ工科大学J. John教授がヨーロッパのネットワーク教育システムである,CINCH-IIについて紹介され,その後W. Wu教授の中

国での放射化学者を大勢輩出する教育プロジェクトについての講演がありました。その後に日本での教育ネットワークプロジェクトや福島第一原発事故が日本の放射線教育に及ぼした影響について,筆者から紹介しました。筆者の感想として,ヨーロッパの教育ネットワークは非常に進んでおり,参考になる部分がたくさんありました。中国のプロジェクトは前回のAPSORCでも紹介されていましたが,今回は日本で発生した原発事故によって見直しがされているとの話もあり,その影響の大きさに感慨深いものがありました。

また,この学会の中で,木村貴海氏((独)日本原子力研究開発機構)に対し,その時間分解レーザー誘起蛍光法を用いたランタノイド元素及びアクチノイド元素の溶液化学に関する貢献によって,日本放射化学会賞が授与され,その受賞記念講演も行われました。その他詳しい発表内容については*Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry*誌でプロシーディングが発行される予定ですので,そちらをご覧ください。

APSORC13の企画・行事について

目新しい企画として,これまで討論会で行われてきた“放射化学若手の会”で,坂口綾准教授(広島大学)と木下哲一氏(清水建設(株))の幹事によって,海外の若手研究者との交流が行われ,日本と海外の互いの研究室の紹介を行ったようです(写真3)。またAPSORC13実行委員会より,若手の研究奨励を目的に優秀ポス

ター賞の授与が行われました。受賞者は、Eita Maeda (Kanazawa University, Japan), Emma Aneheim (University of Gothenburg, Sweden), Maki Honda (Nihon University, Japan), Naoya Inagawa (Gakushuin University, Japan), Sayaka Komatsuda (Kanazawa University, Japan), Takehiro Yamagata (The University of Tokyo, Japan) の6名の方々でした。

また、ボランティア団体の金沢グッドウィルガイドネットワークの協力を得て、開催期間中に海外からの参加者向けの金沢を紹介するツアーを企画しました。参加者は数名程度で多くはありませんでしたが、日本に初めて来たヨーロッパからの参加者（特に随伴者の方）に喜ばれたようです。エクスカーションは合掌造りの里として有名な世界遺産、白川郷へのバス旅行も

行われましたが、学会開期中でこの日だけは天候に恵まれず少し寒かったのが残念でした。しかし海外からの多くの参加者から、金沢の開催地としての雰囲気のスバラしさについて、また主催者のホスピタリティについて感謝の言葉を多くいただき大変ありがたく思いました。

次回の APSORC は、APSORC 国際委員会によって4年後の韓国開催が決定しています。また開催場所としては済州島が提案されています。アジア太平洋地域の国際学会として出発したこの会が、今回のようなヨーロッパを含めた広い地域からの参加を維持できれば、放射化学の分野で重要な国際学会としての位置づけを獲得するだろうと期待しています。

(金沢大学理工研究域)